

「ムン・スンドゥク（文淳得）・プロジェクト」について

—ムン・スンドゥクの漂流物語（朝鮮王朝後期）が与える 現代東アジアへのメッセージ—

About “Moon Soon-Deuk Project”

— A message from a drifting story of Moon Soon-Deuk (late Joseon Dynasty) toward modern East Asia —

友知政樹¹
Tomochi Masaki

【目次】

1. はじめに
2. 「ムン・スンドゥク（文淳得）」と「漂海始末」について
3. 「ムン・スンドゥク（文淳得）・プロジェクト」とは
4. ムン・スンドゥクらの奄美大島における最初の上陸ポイントについて
5. おわりに

1. はじめに

本報告書において、朝鮮王朝後期に実在したムン・スンドゥク（文淳得）と彼の漂流物語を記録した「漂海始末」、それにまつわる「ムン・スンドゥク（文淳得）・プロジェクト」、そして、それらと沖縄経済環境研究所の奄美調査プロジェクト（「奄美群島における観光と環境の総合調査研究」（H26～H28））との関連性を記す。

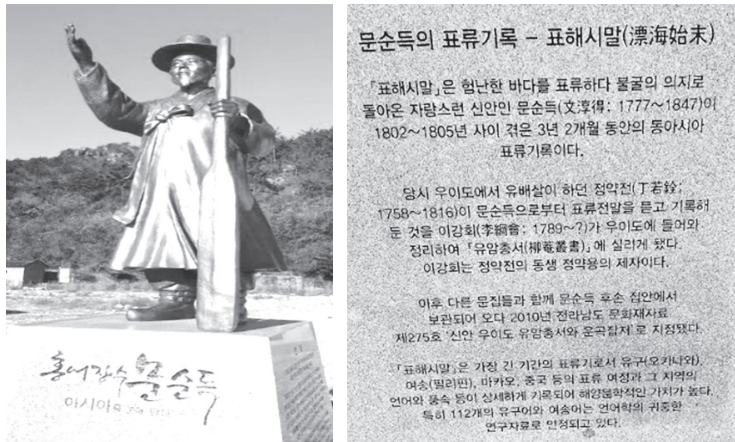
2. 「ムン・スンドゥク（文淳得）」と「漂海始末」について

朝鮮王朝後期、ムン・スンドゥク（文淳得：1777年～1847年）というガンギエイ（海産物）商人が実在した（写真1）（写真2）。彼は、1745年、韓国全羅南道の牛耳（ウイド）島に入島したムン・イルジャンの第4代の子孫であり、ムン・ドクギョムの4番目の息子として生まれた。1801年12月、牛耳島でムン・スンドゥクと彼の叔父ムン・ファギョム、そして、村人イ・ベクグン、バク・ムチョン、イ・ジュンウォン、ギム・オクムン（少年）など6人が黒山島の南部数百里の太砂島にガンギエイを買いに行き、翌1802年1月18日の帰路の途中、牛耳島西南部数百里で大風に遭遇し漂流が始まった。そして、同年

¹ 沖縄国際大学経済学部地域環境政策学科

2月2日に、当時の琉球國の大島（奄美大島）に漂着した。最初の漂着地は奄美の「羊寛村」であったという記録が残っている。

写真1 牛耳島にあるムン・スドゥクの銅像（左）と説明書き（右）



(撮影日：2015年9月21日、撮影場所：牛耳島、写真提供：筆者)

写真2 ガンギエイ



(<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)

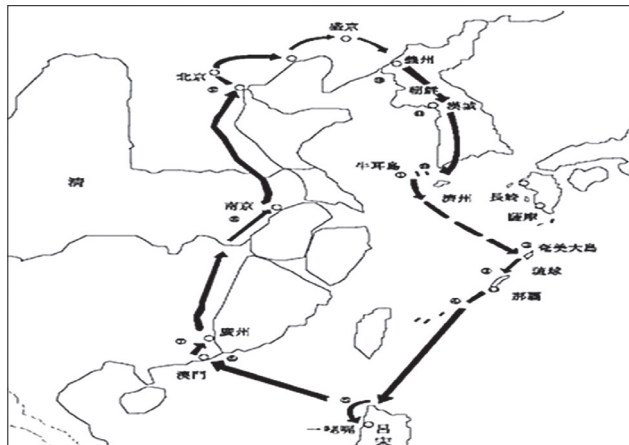
琉球國により約8か月間保護されたムン・スドゥクらは、同年10月7日、郷里に帰るべく、琉球から清（中国）に向けた進貢船に同乗し福建へと出発した。しかしながら、またもや大風に遭遇し、二度目の漂流を経験することとなる。そして、同年11月1日、呂宋（ルソン、現在のフィリピン）に漂着し、そこにおよそ8か月間留まり、翌1803年7月、ムン・スドゥクらは、廣州（広州）、マカオ（澳門）、北京、義州を経て、ようやくソウルに到着した。ムン・スドゥクらは、1805年1月8日、ついに生まれ島の牛耳島に帰郷を果たした。最初に漂流した時から3年以上の時間が経過していた（図1）。

これはまさしくムン・スドゥクの冒険とも呼べる出来事なのであるが、東アジアを長期にわたり漂流し、多くの異文化に触れ、また、多くの人々に助けられながらも、不屈の精神で帰郷を果たしたムン・スドゥクらの3年に余る経験を記した書物が存在する。

それが、「漂海始末」である（写真3）。

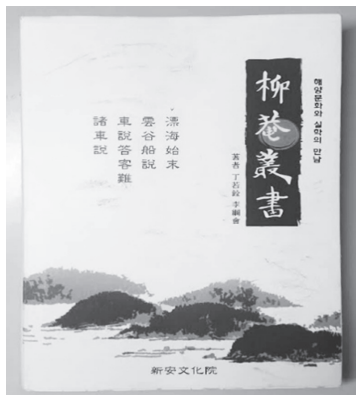
当時、牛耳島で流刑になっていた両班、チョン・ヤクジョン（丁若銓：1758年～1816年）が、ムン・スドゥックから一連の漂流顛末を聴取り記録した内容を、弟子のイ・カンフェ（李綱會：1789～？）が牛耳島に入ってまとめた「柳菴叢書」の中に「漂海始末」として残していた。この書物は牛耳島に今も現存するムン・スドゥックの子孫の家（写真4）で保管され、2010年、全羅南道文化財資料第275号「新案牛耳島柳菴叢書と雲谷雜稿」に指定された。「漂海始末」は、琉球、呂宋（フィリピン）、マカオ（澳門）などの漂流の旅の行程記録として、そして、それらの国々の言語、風俗などが詳細に記録されている文化的記録として、非常に価値が高いものである。その中には、112個の琉球語と呂宋語（タガログ語）に関する記述もあり、言語学の貴重な研究資料として認められている。

図1 ムン・スドゥックらが辿った漂流の地図



（作成：木浦大学・崔誠桓教授）

写真3 「柳菴叢書」(左) に収められた「漂海始末」(右)



(<http://www.heritage.go.kr>)

写真4 牛耳島に現存するムン・スドゥックの子孫の家



(撮影日：2015年9月21日、撮影場所：牛耳島、写真提供：劇団ケッドル)

3. 「ムン・スドゥック (文淳得)・プロジェクト」とは

「ムン・スドゥック (文淳得)・プロジェクト」とは、漂流民としてのムン・スドゥックの物語を通して、東アジアの交流と平和を求めるプロジェクトである。このプロジェクトは、2010年、韓国全羅南道西南部の木浦市に拠点を置く劇団ケッドルが、ムン・スドゥックの漂流の旅を舞台演劇として制作・公演したことがきっかけとなった(写真5)(写真6)。この舞台演劇は韓国全土で公演され、大成功をおさめた。

劇団ケッドルは1981年、木浦に旗揚げし、韓国のマダン劇系を導いてきたトップランナーである。現在、ムン・グワンス代表をはじめ17名の専門団員らが活動し、マダン劇、演劇、伝統的な演劇、ミュージカル公演を通して、時代の変化に能動的に対処する芸術活動を展開している。全羅南道指定専門芸術法人舞台芸術団体であり、「木浦世界マダン・フェスティバル純粋民間祭り」を16年以上運営している。劇団ケッドルは地元地域の文化資源を活用し、韓国国内はもちろん、世界各地において公演・交流活動を展開する芸術団体である。

この「ムン・スドゥック (文淳得)・プロジェクト」において、劇団ケッドルは、最初にムン・スドゥックが漂着した琉球(2015年から交流開始)、そして、フィリピン(2016年から交流開始)、マカオ(2017年から交流開始)、中国との国際交流を通じて、東アジアの平和連帯構築を実践している。琉球における交流は、沖縄県沖縄市の園田青年会(エイサー太鼓踊り)(写真7)を中心に、沖縄国際大学に所属する筆者ら、宜野湾市の佐喜真美術館、そして「琉球・沖縄文化プロジェクト〈保全・回復・創造・継承〉」を推進すべく2014年に設立された沖縄県内の文化人有志の会「琉球の島々文化連絡会」が交流の窓口を担っている。沖縄市園田青年会に協力要請し参加してもらった理由は、「漂海始末」にムン・スドゥックが当時の琉球で「太鼓踊り」を目撃し楽しんだという記述があることに由来する。

写真5 劇団「ケッドル」のホームページ



(<http://www.getdol.com>)

写真6 舞台演劇「マダン劇：ガンギエイ商売ムン・スドゥック漂流記」



(<http://www.getdol.com>)

写真7 園田青年会と劇団「ケッドル」



(撮影日：2015年9月20日、撮影場所：木浦市、写真提供：劇団ケッドル)

2016年にはフィリピン北西部のビガン市にある北フィリピン大学（UNP）の舞踊団を中心に沖縄からの関係者らを交えて交流事業を展開し（写真8）、2017年はそれらに加えマカオの芸術家集団や舞踊団との交流を展開し（写真9）、お互いの歴史・文化の多様性を理解し合い、友好関係の構築事業を行ってきた。

「ムン・スンドウック（文淳得）・プロジェクト」の今後の更なる展開として、東アジアの国々のメンバーが一丸となり、共にひとつの舞台演劇を構築することが考えられる。これは、ムン・スンドウックが3年余りの漂流の後に無事に帰郷できたのは、やはり東アジアの国々の温かい協力関係があったからであるという歴史的事実を通して、これからの東アジア、そして世界のあり方を考えるという壮大な目的につながるものである。

写真8 北フィリピン大学（UNP）の舞踊団と劇団「ケツドル」



（撮影日：2016年12月10日、撮影場所：木浦市、写真提供：劇団ケツドル）

写真9 木浦市においてパフォーマンスを披露するマカオ舞踊団



（撮影日：2017年9月15日、撮影場所：木浦市、写真提供：劇団ケツドル）

4. ムン・スンドウックらの奄美大島における最初の上陸ポイントについて

ここで、沖縄国際大学・沖縄経済環境研究所の奄美調査プロジェクト（「奄美群島における観光と環境の総合調査研究」（H26～H28））と「ムン・スンドウック（文淳得）・プロジェクト」との関連性に触れておきたい。

第2節で少し言及したが、「漂海始末」にはムン・スドゥックらが1802年2月2日に当時の琉球國の大島（奄美大島）に漂着し、最初に奄美大島の「羊寛村」に上陸するという記録がある。以下は「漂海始末」からの抜粋である。

（一月）二十九日 平明見一大島在東南午時抵下訂而停舟俄見六七人乘艇來接先之
以水繼之以粥時不食三日喜可知也問之乃球國大島也〔琉球今改中山〕

二月初二日 舟行五十許里抵羊寛村〔大島也〕下陸架一廬使居之門外又有廬八
人守之

三月二十日 舟行沿島百許里抵于禽村前〔大島地〕

しかしながら、実のところそのムン・スドゥックらの奄美における最初の正確な上陸ポイントの地名が定かになっていないのである。「漂海始末」にはその地名が「羊寛村」と記されているが、奄美大島にはそのような地名はなく、ムン・スドゥックが何らかの理由により誤って地名を認識（記憶）していたものと思われる。

「琉球・呂宋漂海録研究（1994年、武蔵野書院）」を著作し、日本語による「漂海始末」を初めて本格的に紹介したのは沖縄出身で広島大学教授の多和田眞一郎氏である（写真10）。その功績は大変に意義深いものである。本書の内容は、第1章：解題および資料、第2章：本文影印、第3章：本文翻刻、第4章：「漂海始末」「風俗」「宮室」「衣服」「海舶」「土産」の訓み下し文、第5章：「漂海始末」「風俗」「宮室」「衣服」「海舶」「土産」の現代日本語訳及び注釈・解説、第6章：「言語」の翻字（転写）、第7章：「言語」「琉球」語の解説、第8章：「言語」「呂宋」語、第9章：「言語」「琉球」語の分析、第10章：「言語」「琉球」語索引、となっている。

そのなかで、一説には「羊寛」は奄美大島の南西に位置する「与路島」ではないかとされてきたが、筆者が参加した一連の奄美調査で「羊寛」と表記された地は、奄美大島宇検村にある「屋鈍」ではないかということが推察されるようになった。それを裏付ける理由として、

- ① 1月29日の明け方に洋上のムン・スドゥックらが奄美大島を南東方向に見たという記述から、ムン・スドゥックらが奄美大島の北西部の洋上にいた、つまり屋鈍や宇検付近で漂流していた可能性が高いという点（図2）。
- ② 屋鈍の琉球語音（＝ヤドゥン）と「羊寛」の朝鮮語音（＝ヤンクワン）が類似している。したがって、ムン・スドゥックが誤って記憶した可能性が高い点（図3）。

③ 海流や風の影響で屋鈍（海岸）に様々な漂着物が日常的に陸揚げされている点（写真11）。

④ 3月20日の記録には「船で島に沿って百許里（約40km）行って于禽村前（大島）に着いた」とある。屋鈍から宇検までは直線距離では約5kmであるが、島に沿って移動すると、屋鈍から宇検までの移動距離がちょうど約40kmである点。

などが挙げられる。ちなみに、屋鈍集落にはこれまでいくつかの漂着の逸話が遺されているということも耳にした。

なお、本調査に関して、瀬戸内町立図書館・郷土館の町健次郎学芸員に特に大変お世話になったが、上記の筆者の推察に誤りがあるならば、それは勿論、全て筆者の責任である。ちなみに、「大島要文集」にはムン・スドゥクらの漂着に関する記録を見つけることはできなかった。奄美におけるムン・スドゥク関連資料の検索は今後の課題として残る形となった。

写真10 韓国版の「琉球・呂宋漂海録研究」



(多和田真一郎・武蔵野書院)

図2 奄美大島観光マップより



図3 屋鈍の琉球語音と「羊寛」の朝鮮語音が類似

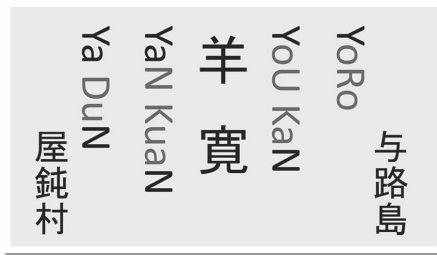


写真11 美しい屋鈍海岸（上）と屋鈍集落案内図（下）



（撮影日：2016年8月30日、撮影場所：奄美大島宇検村屋鈍集落、写真提供：筆者）

5. おわりに

これまで、ムン・スドゥック（文淳得）と彼の漂流物語を記録した「漂海始末」、それに関わる「ムン・スドゥック（文淳得）・プロジェクト」、そして、それらと沖縄経済環境研究所の奄美調査プロジェクトとの関連性について述べてきた。これからの東アジア、そして世界のあり方を考えるきっかけをも与えてくれる、「ムン・スドゥック（文淳得）・プロジェクト」は多くの示唆に富んでおり、大変意義深いプロジェクトである。今後の継続と更なる発展に大いに期待したい。

【参考文献】

- [1] 丁若銓・李綱會「柳菴叢書・漂海始末」
- [2] 多和田 真一郎「『琉球・呂宋漂海録』の研究 ―二百年前の琉球・呂宋の民俗・言語」、1994、武蔵野書院
- [3] 崔誠桓「文淳得漂流研究―朝鮮後期文淳得の漂流と世界認識―」、2012、民俗院
- [4] 文純實「朝鮮王朝後期漂流記録にみる対外認識について―『漂海始末』を中心に」、2013、中央大学論集 34
- [5] 劇団「ケッドル」ホームページ (<http://www.getdol.com>)
- [6] 韓国政府文化財庁 ホームページ (<http://www.heritage.go.kr>)
- [7] 名瀬市史編纂委員会「大島要文集：名瀬市史編纂資料」
- [8] 奄美大島観光マップ